

いせのき 絹 紀行

世界文化遺産に日本が推薦していた「富岡製糸場と絹産業遺産群」が、6月に登録される見通しだ。正式に登録されれば、伊勢崎にも生まれる世界遺産。改めて、どんなものか見てみよう。



田島弥平旧宅(国指定史跡)／現在も居住している個人宅のため建物内部へ立ち入ることはできない。10人以上の団体で見学を希望する場合は、田島弥平旧宅案内所(TEL0270-61-5924)まで問い合わせを

周囲を畑に囲まれ、養蚕農家群が今も残る島村(現伊勢崎市境島村)。明治時代、この小さな村から、先進的な事業者としてイタリアへ渡った人物がいる。世界遺産登録に向けて注目されている、田島弥平がその人。現在、利根川の南北に分かれた島村を渡船がつかなく、その南側に旧宅がある。

群馬の絹遺産が世界共有の遺産へ

紀元前の中国で作られ始めた絹は、19世紀、ヨーロッパで大量生産されるようになる。この頃、開国した日本。近代的な技術を学び、独自の技術革新と繭の大量生産に成功した。一部の特権階級のものであった絹が、身近な存在になったのである。そしてこの成果は、日本が近代工業化世界に仲間入りするカギとなった、というのが今回、世界遺産への「登録が適当」と評価された理由のようだ。

富岡製糸場のほか「絹産業遺産

群を構成する資産は3つ。近代養蚕農家の原型となった「田島弥平旧宅」、「清温育」を確立した「高山社跡」、自然の冷風を利用して蚕の卵を貯蔵した「荒船風穴」。

新しい養蚕技術で日本をリード

かつて、良質なことでヨーロッパにも知られていた、島村の蚕種(さんしゆ)。文政5年(1822年)、田島弥平が生まれた家も、有力な蚕種製造農家だった。

蚕種とは、蚕の卵のこと。蚕蛾に産卵させた紙を蚕種紙(種紙)といい、養蚕農家は購入した蚕種紙から蚕を孵化させ飼育した。

島村は、幾度となく大洪水に見舞われている。しかし、洪水の度に田畑を流し、中洲の島を削って川筋を

変える利根川は、桑の生育に適した砂質土も運んできた。

地の利を得て、始まった蚕種業だったが、当時の蚕の飼育は難しく、年によって収量の差が大きかった。弥平は、父・弥兵衛と共に各地の養蚕方法を研究し、自然の通風が重要だという考えに至る。遂に大成した「清涼育」は、飼育日数がかかるが失敗が少なく、非常に合理的なものだった。

幕末、弥平は微粒子病で養蚕に壊滅的な被害が出ていたヨーロッパへ向けて、横浜からの蚕種輸出に積極的に入り組み大きな利益を得た。明治に入りその好況も終わると、島村の人々はヨーロッパへの直輸出を思い立った。弥平も、第一回渡航メンバーの一人。約5万枚の蚕種を携えてイタリアに渡った。

直輸出は明治12年から15年にかけて計4回行われた。最後の直輸出でイタリアから顕微鏡を持ち帰られると、弥平は顕微鏡を用い、蚕の病気の検査研究を行う。また、宮中養蚕にもたびたび奉仕するなど、養蚕業の発展に貢献を続けた。

「清涼育」を実践した田島弥平旧宅

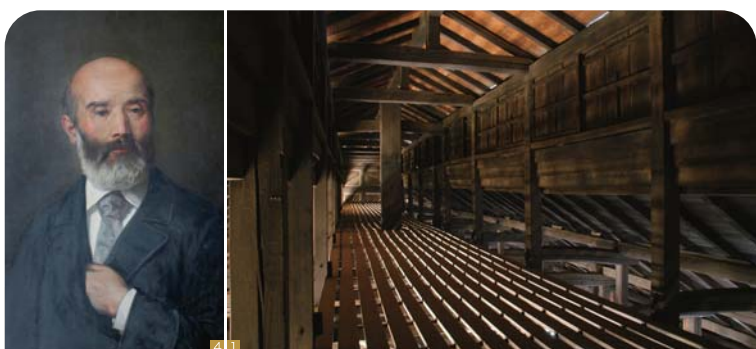
「清涼育」を広めるため明治5年(1872年)『養蚕新論』を著した弥平の下には、全国から多くの養蚕伝習生が訪れた。旧宅に今も残る、やぐら・越屋根・付きの住居兼蚕室での生産は、全国の養蚕農家の手本となったもの。

屋根幅いっぱいには造られた総やぐらが特徴で、風通しをよくするため窓が多い。1階は住居、2階が蚕室

で、2階北東隅には顕微鏡室が増築されている。約1200坪の敷地に現存するのは文久3年(1863年)に建てられた主屋のほか、桑を保管し蚕の成長に合わせて桑の葉を加工した「桑場」、蚕種を貯蔵した「種蔵」、洪水に備え石垣を積んだ「井戸」など。

養蚕農家の生活は、「お蚕さん」と人が一体となっていた。夜、静かになると、育ち盛りの蚕が桑の葉を食べるザワザワという雨音のような音が、2階から聞こえたものだという。

全国の織物の産地でも素材となる生糸はほとんどが輸入品という今。地元の人にとっては見慣れた養蚕農家群が、世界遺産登録を機に地域の新しい魅力発信元となるか。その風景に、群馬県民であることが誇らしくなる予感だ。



1 弥平が考案した「やぐら」の内部。ここにある窓を開閉して蚕室の温度や湿度を調整した。2 「養蚕新論」の内容は蚕の飼育法から桑の育て方、蚕室、蚕種製造法まで幅広い。多くの図が記載されており当時の養蚕の様子がよくわかる。3 良質な蚕種を販売するためにイタリアから持ち帰った顕微鏡。4 明治13年(1880年)に描かれた田島弥平の肖像画



写真協力：伊勢崎市、群馬県、群馬県立図書館

富岡製糸場と絹産業遺産群をめぐってみよう！

富岡製糸場

富岡市富岡1-1
☎0274-64-0005(富岡市富岡製糸場課)
大人500円、高大学生250円、小中学生150円



日本の輸出品の大半を占めていた生糸の品質向上と増産を図るため、明治政府が設置。フランスの技術を導入した日本初の器械製糸工場で、貴重な建物群が現存する。

高山社跡

藤岡市高山竹之本237
☎0274-23-5997(藤岡市文化財保護課)



蚕室の温度調整や換気をきめ細かく行う養蚕法「清温育」を完成した高山長五郎が設立した、養蚕教育機関「養蚕改良高山社」発祥の地。「清温育」は日本近代養蚕法の標準となった。

荒船風穴

甘楽郡下仁田町南野牧甲10690-1外
☎0274-82-5345(下仁田町ふるさとセンター)



夏でも2℃前後の冷風が吹く風穴に作られた蚕種の貯蔵施設。国内最大級の同施設は、自然の冷気で蚕種の孵化を調整し、年複数回の養蚕を実現。繭の増産に貢献した。

日本基督教団 島村教会

伊勢崎市境島村2509-2
☎0270-63-3636(伊勢崎市文化財保護課)
※外観は随時見学可、内部は団体のみ対応



弥平旧宅を訪れるならこちらへも。蚕種輸出のために横浜に行った蚕種業者によって島村にキリスト教が伝えられ、明治30年(1897年)に建てられた。洋風の意匠が特徴。国登録有形文化財。